

談話マーカの新たなアプローチ

- Face行為から見た「それで」Lロ -

曹永湖*
yhcho@deu.ac.kr

<目次>

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1. はじめに | 4.1 「それで」のFace-Threatening機能 |
| 2. 談話における「それで」の分布と意味 | 4.2 「それで」のAnti-face-threatening機能 |
| 2.1 自分のturn中に用いれる「それで」 | 5. 「それで」と談話の連続性 |
| 2.2 Pre-startsとして用いれる「それで」 | 5.1 「それで」とpositive factor |
| 3. 「それで」とFace行為 | 5.2 「それで」とface-threateningの中和 |
| 4. 談話マーカ「それで」とFace行為 | 6. 終りに |

主題語: Face行為(Face act)、FTA(Face threatening act)、Anti-FTA(Anti-Face threathing act)、談話マーカ (Discourse marker)、それで(sorede)

1. はじめに

一般に「それで」は、「X。それで、Y。」のように前の文の内容を認めて、その内容を後に述べるべき事柄の原因であると認めるということを表示する接続詞として用いられる。しかし、談話において話者交代(turn-taking)が行われる時に、pre-startsとしてあらわれる「それで」はそのような分析によっては十分に説明できないと思われる。

そこで本稿では、談話の流れの中でpre-startsとして用いられ、聞き手と話し手の相互関係を成立させるだけでなく、聞き手と話し手の談話の展開を支配し、それを表示する働きを持っている談話マーカとしての「それで」を取り上げ、face行為理論という観点から談話における「それで」の機能や特性を分析し、考察を行う。

談話上で用いられる「それで」は、本質的にfaceを脅かす談話マーカである。談話がfaceの相互作用によって成立するという観点からみると、談話マーカとして用いられる「それで」はFTA機能を持っている(Face-Threatening Act、以下、FTAとする)と共にanti-FTAの機能

* 東義大学校 人文社会科学大学 日語日文学科 教授

を果たしている。また、「それで」に続く表現は積極的にface-effectsをあらわす表現、あるいは、それを中和する表現を用いたりするために用いられると思われる。本研究では以上の点をFace行為を中心に分析し、その意味機能を明らかにすることを目的とする。

2. 談話における「それで」の分布と意味

従来、日本語の接続表現「それで」は、一般に前の文の内容を認めて、その内容を後に述べるべき事柄の原因であると認めるということを表示する接続詞として用いられる。しかし、談話の流れの中で用いられる「それで」はそのあらわれる位置によって分類され、それによってより明確にその機能の違いを明らかにすることができる。

実際の談話において「それで」は、二つの位置にあらわれる。その一つは、自分のturn中に用いられる場合であり、もう一つは、次の話し手がturnをとる前のpre-startsとして用いられる場合である。

今までの文法研究では、前者が取り上げられることが多かったが、談話の研究では後者の談話における機能が、face行為理論、politenessの研究などで注目されている¹⁾。

2.1 自分のturn中に用いれる「それで」

まず、自分のturn中の発話にあらわれる「それで」を三つの例文から考察して見る。

- (1) 売場が大きいでしょ。それで、そんなに大きく見えないのよ。
- (2) 今、おれちょっと調子が悪いのね。それで、代わりに行ってくれない?
- (3) 彼女は美しい。それで、早く結婚できたのよ。

例えば、「それで」のような接続詞の前の発話をP、その後の発話をQとあらわすことにすると、(1)、(2)におけるPとQの関係は、それぞれ、意味論的に「根拠と判断(warrant and inference)」、「発話の理由と発話行動(motive and action)」、「原因と結果(cause and result)」といった関係を持っていると言える²⁾。いわゆる、PとQの関係は「PそれでQとなる型」であ

1) 談話マーカ―の機能に関する研究は、筆者の知る限り、韓国語の談話研究ではあまり見当たらないが、英語の場合、Schiffirin(1987)、Bell(1995)、Onodera(1993)などがある。

る。しかし、この場合に用いられる「それで」は、文法的カテゴリーとしての意味用法を持っているが、PとQを統語的に関連付ける接続詞として用いられるため、文や句から切り離し、単独で用いることができない。つまり、談話マーカ-としての機能は持っていない。したがって、本稿では分析対象から外すことにする。

2.2 Pre-startsとして用いれる「それで」

次にpre-startsとして用いられる「それで」を見てみる。この場合の「それで」は、同一の発話者がただ理由などを述べるために用いられているわけではなく、談話上では文法カテゴリーを超えたさまざまな働きを持つため、上述のような説明では捉えられない特徴を持っていると考えられる。

また、この場合の「それで」は、発話の流れの中で話題の焦点を自分に集めたり、話題を転換したりし、相手と自分の相互間の発話行為をマークする談話マーカ-としての機能も果たしている。

発話の連続の中で「それで」の直前に話者交代するような談話を取り上げ、単純化して示すと、次のような構造になる。

モデル1	話者	: P
	話者	: <u>それで</u> Q
	話者	: R

PとQは、「それで」によって関係づけられる連続の発話をあらわしているが、実際の談話の構造はこれほど単純なものばかりではない。例えば、Pに相当する部分が、先行する話者、話者の複数のやり取り全体を含む場合もある。ここで注目しておきたいところは、このP-Qの発話が同一の話し手によるものではないという点である。

このような談話上の接続表現の研究で注目されるのは、van Dijk(1979)である。van Dijk(1979)は、接続表現(connectives)を意味論で扱うべきものと語用論で扱うべきものの二つに分けている。そして意味論的接続表現は事実と事実の関連を示し、語用論的接続表現

2) Schiffrin(1987)を参照。また、この他、接続語の関係付けのレベルを大きく二つに分けて考える観点もある。例えば、「external-internal」(Halliday and Hasan 1976)、「客観的提示 - 主観的操作」(池上 1983)、「対象の論理 - 私の論理」(奥田 1986)などがそれである。

は、一つの言語行動ともう一つの言語行動との間の関係を示すとしている³⁾。pre-startsとしての「それで」はまさに、後者ような関係をあらわすものと考えられる。

一方、二つの発話が「それで」によって接続される時、それが一人の話し手による場合と、異なる話し手による場合では、そのふるまい方や表現形式には微妙な相違があらわれる⁴⁾。例えば、次のような例を考えてみる。

(4) 1A: 本日の会議はこれで終わりです。*それで、何をいいたいんですか?

(5) 1A: 今夜はあまり時間がありませんよ。

2B: それで、どうするのよ。

(6) [友達のお母さんの話に対して]

1A: オフクロと話してたのか?

2B: お母さんにカンチの好きな食べ物色々聞いたからさ、今度作っ上げるね。

3A: それで、おまえ、何を考えてるんだよ。

4B: 何怒ってるの?

(東京ラブストーリー)

(4)、(5)はともに、平叙文の後に、「それで」を介して疑問文が続く構造を持っている。しかし、二つの例における「それで」の適格性を見ると、正反対の結果を示していることがわかる。つまり、自分の発話の中に用いられるの場合は、「それで」が使用できないのに対し、話者交代のさいにpre-startsとして用いられる場合は、極めて自然なものとなっているのである。pre-startsとして用いられる「それで」は、(5)のタイプに加えて、さらに多様な表現の連続の中に認められる。

一方(6)は、「それで」が話し手からの発話に対して応答する例である。この場合の「それで」は、通常の順序と逆転した関係をあらわしている。つまり、3Aの発話において「それで」で導かれているのは、相手からの意見に対する回答だけではなく、相手に対する強い反発なのである。

このようなことから「それで」は、PとQが異なる表現形式である場合、前者(4)は、その組み合わせにかなりの制約があることを意味し、後者(5)、(6)の場合は、かなり広範な組み合わせを許すということがわかる。

3) van Dijk(1979)は、接続表現が語用論的に使われたとしても意味の痕跡を残すであろうと述べている。「それで」は原因、理由となる表現を導くと考えられるため、その意味は残っていると主張することもできるが、pre-startsとして用いられる場合、ほとんどその意味は派生的にのみ働くと考えた方がよい。

4) Pre-startsとしての「それで」には、疑問、命令、勧誘、誘いなどの多様な表現類型の連続が認められる。

次の節では、pre-startsの時にあらわれる「それで」を分析対象とし、談話の中で会話参加者の間に常に存在するfaceという観点を取り入れ、「それで」が聞き手と話し手の間のfaceをどのようにマークし、どのような談話上の機能を果たしているのかについて考察を行なう。

3. 「それで」とFace行為

Brown and Levinson(1987)によると、positive politenessは、聞き手の思っているその姿を評価し、認めることによって実現される。また、negative politenessは、聞き手の行動の自由を守り、負担を押し付けないことによって実現される。しかし、Brown and Levinson(1987)の politenessに対する二分法は、その概念や理論を適用する際に明解な基準を与えてくれないため、曖昧さが存在し、経験的な研究を行なうには妥当ではないと指摘されている(Fraser 1990)。そこで、本研究では客観的に把握することが可能な会話参加者の間に見られるfaceの相互作用を中心に分析を行うことにする。

Politenessを実現することは、聞き手のfaceを守ることである。従って、これらの politenessが実現されない恐れのある発話は、faceを脅かすこととなり、それを避けるために何等かのストラテジーが用いられることになる。逆にいえば、このようなストラテジーが用いられることは、faceが脅かされていることを明示するものである。どのようなストラテジーがそれぞれの politenessで用いられるかはBrown and Levinsonが詳しく説明している⁵⁾。

Face行為理論では、談話の成立を聞き手と話し手のfaceのやり取りに基づいている。つまり、会話参加者はお互いのfaceを守るという前提に立って、会話をはじめるのである。そして、談話が進むにつれ、時間、場面、文脈などによって相互のfaceを調整しながら談話が構成され、続けられる(曹1998)。しかし、談話において自己のメッセージを効果的に伝達するために、会話参加者は相手のfaceに注意を払っているが、常にそのfaceが守られているわけではない。時には、faceを脅かすことで相手の反応を促し、話題を展開したり、方向づけたりする場合がある。このような談話の場合、話し手によって行われたFTAは相手

5) Brown and Levinson (1987)は politeness ストラテジーと呼び、Meier(1995)は修復行為(repair work)と呼んでいる。詳しくは、Brown and Levinson (1987)、Meier(1995)参照。

の反応、つまり発話行為から把握することができる。

このような観点から politeness を考えてみると、politeness はある発話行為を示すものではない。それは、会話参加者が自分の発話の中で、あるいは、相互間の発話の中で、各々の face に注意を払いながら、face を守ったり、脅かしたりしている際に起こりうるものである。つまり、会話参加者が face に注意を払わない時、多くの談話で face を脅かす行為が発現し、丁寧でない無礼な行為となり、相手から反発されたり、自分自身から補償行為を行わなければならないのである。また、この face 行為という観点により、Brown and Levinson が politeness 現象であると考えて来た多くの概念を含むストラテジーを、意図された敬意として扱うことより、もっと広範囲にもものを扱うことが可能となる。このような概念の範囲の拡張によって、特定の文構造によって丁寧か丁寧でないかが決定されるのではなく、談話上での聞き手と話し手の face のやり取りから politeness が保持されているか否かが決められることになる(曹1998)。つまり、politeness という現象は、発話者相互間の face の保持と FTA の中和によって成立するものとして考えなければならないのである。

以上のような face 行為を軸にして、談話マーカ―として用いられる「それで」について考えてみると、話者交替のさいに pre-starts としてあらわれる「それで」は、逆接の接続詞の意味を残しており、Brown and Levinson が主張している politeness ストラテジーとは考えられない。それよりむしろ、相手の意見や主張などを受け入れながらも、相手に反対する意見を述べる働きを持っているため face を脅かす働きがあると言える。それは、社会的に上位の者に「それで」を用いることができないことから裏付けることができる。

Face は、会話参加者自身の思っている自分の姿つまり、自己というもの一を評価し、認めてもらうことによって成立するものである。したがって、相手に対して「それで」と言うと、相手の発言した内容に同意しながらも十分ではないと感じ、異議をさしはさむことになり、その意味で face を脅かすことになるのである。そこで「それで」が、相手と意見が相違している時に用いられるとすれば、共通点を作り出すとか、協力関係を成立させるためのマーカ―としての役割を果たすものが、談話中に存在するはずであるという仮定が成り立つ。逆に言えば、そのようなマーカ―が存在出来ない時には、「それで」があらわれないか、他の face を脅かす可能性の少ないものが用いられると予測される⁶⁾。

また、turn-taking の時に pre-starts として用いられる「それで」には、相手の意見に対して反発する、つまり、相手の face を危険にさらす働きがあるため、「それで」を用いた話し手

6) このような場合「あとう」、「ただ」のような談話マーカ―が用いられると予想される。

は、何等かの補償的表現をして、そのfaceを保ってやらなければならないことになる。そのために、文末に「~でしょう」、「~ね」、「~でしょうね」のような相手の同意を求める表現を用いることによってfaceの補償を実現すると考えられる。つまり、この表現は談話の主題について同じ意見をもつ側に立っているという確認、あるいは自分の意見を認めて自分の側に立ってもらいたいと連帯を求める働きをしていると言える。このようなことから、「それで」と一緒にあらわれる「~でしょう」、「~ね」、「~でしょうね」では、相手に対するFTAをやわらげるmitigatorとしての役割があると言える。

次節では談話マーカ―としての「それで」が、どのように相手に対するFTAとして機能し、どのような手段を用いてFTAを中和しているのかを考察し、談話における「それで」の意味用法の特徴を明らかにする。

4. 談話マーカ―「それで」とFace行為

4.1 「それで」のFace-Threatening機能

「それで」は直接的に相手の意見に反対するface-threateningマーカ―なので、政治討論のような公的な場や社会関係の中で上位の人には用いることができないと予測される。しかし、談話において「それで」と同じくpre-startsとしてあらわれ、相手の意見との対立を表現する「それでは」は用いることができる。このような違いは何によるものなのかを知る必要がある。これは「それでは」によって表現される曖昧な態度、または「相手に話題内容を確認する」などの間接的な態度が、相手に直接、反対や不同意を表すことを避け、相手のfaceを脅かさないような補償作用、丁寧さが含まれているためであると思われる。例を見てみる。

- (7) 1A: 税率の調整は不可欠なことではないでしょうか。
 2B: それで、引き上げることですか。
 2B': それでは
- (8) 1A: 今回の案は国民に大きな負担を与えることになると思います。
 2B: それで、実行できないということですか?
 2B': それでは

(7)、(8)のような政治討論の場面では「それで」があらわれない。なぜなら、「それで」には、「それでは」が持っているFTA機能を感じさせなかったり、あるいは、曖昧性によってFTAを和らげたりする機能をもたず、むしろ、faceを直接に脅かす機能があるからである。例(7)、(8)では「それで」だけではなく、(9)のような表現を補足的に付け加えて用いられると考えられる。

- (9) それはその通りですが
おっしゃる通りだと思いますが
反対することではないですが
おっしゃることはよく分かりますが
どうお考えなのか分かりませんが

これらの表現は、自分の意見を相手に主張する前に一種のクッションを置くことによって、語調をやわらげ、相手に対するFTAをやわらげようとするものである。また、これらは付けても付けなくても、主張の内容が変わるわけではないので、情報的にはまったく余分なものであるが、対人関係や談話の流れを円滑に維持するためには重要な働きをしていると考えられる。つまり、「それで」の形のままで用いてしまえば、相手のfaceを直接に脅かすことになるため、同じ意味用法を持っているが、faceに中立的な、またはfaceを脅かさない表現を用いていると考えられる(曹 2000)。

次に、社会的な上下関係において「それで」がどのように用いられるのか見てみる。

- (10) a それで、行きたくない。
b それで、やらなければいけない。
c それで、明日はちょっと行きにくいかと思いますが。
d それで、行かないわけにはいかないだろう。

(10)のa、bは、社会関係が上位の者の場合は使用可能であるが、下位の者は使用できない。つまり、下位の者が用いると相手の社会的faceが脅かされてしまうのである。cの場合、自分の意図を曖昧化する「ちょっと」や「~かと思う」のような婉曲的な表現とともに、言い切らない文末表現「~ますが」を用いて、相手に対するFTAをredressしようとしている。つまり、下位の者でも用いることができるのである。この場合の「~ますが」は、mitigatorとしての役割をしているといえる。一方、dは上位の者のみ使用可能である。なぜなら、「~だ

ろう」は自分の意見を強く表明し、相手に自分の意見を意図的に押し付けるといった意味合いがあるのでmitigatorとしての役割を果たしていないからである。

(6) [友達のお母さんの話に対して]

1A: オフクロと話してたのか?

2B: お母さんにカンチの好きな食べ物色々聞いたからさ、今度作っただげるね。

3A: (それ)で、おまえ、何を考えてるんだよ。

4B: 何怒ってるの?

5A: もう電話でるなよ。

(東京ラブストーリー)

(6)の場合、2Bが1Aの質問に対して‘お母さんにあなたの好きな食べ物を聞いたので作っただげる’と自分の意思を直接的に述べながら、「ね」というmitigatorを用いて1Aのfaceを守ろうとしている。そこで3Aは、自分のfaceが十分に保持されていないと感じ、それを知らせるために「それで」を用いて相手に反発している。つまり、FTAマーカ―として用いられている。また、「それで」は続く表現で「何を考えてるんだ」という直接的な表現を用いて相手に強く反発すると共に自分の意思を押し付けている。その結果、4Bでは「何怒ってるの?」という疑問表現を用いて相手に反発している。そこで5Aは「電話するな」という強い意志を表す表現を用いてさらに相手に反発している。

(11) [友人同士の発話]

1A: 彼女のこと、好きなの?

2B: ああ、好きだった。

3A: あ、過去形。

4B: 結婚しちゃうんだから。

5A: それで諦めちゃうの?

6B: しょうがないだろ。

7A: だめ、頑張り。

(東京ラブストーリー)

(11)の場合、AがBを説得するためにいくつかの状況を聞き出しながら相手を押し付けている。そこで5Aは、相手の間接的な押し付けに反発するため「それで」を用いている状況である。すなわち、4Bが「結婚しちゃうんだから」と自分の意思をmitigatorを使用せず、5Aに対

7) 文末の表現形式に関して言語使用者の個人的な好みによる問題が多く作用すると思われる。

してFTAを実行したことにより、5Aは自分のfaceが脅かされていると感じ、「それで」を用いて相手に反発しているのである。この場合、4Bの情報は自分(A)にとってはすでに承知のものであるため、「それで」によって‘そんなこと言わなくても先刻承知だ、そのままよいのか’という態度をあらわし、結果として相手に対するface-threatening機能を果している。

以上の観察から「それで」は、相手のfaceを脅かす機能を持つマーカであることが分かる。

4.2 「それで」のAnti-face-threatening機能

談話の流れの中に「それで」のみの形であらわれる場合がある。この場合「それで」は相手の発話に間接的な押し付けが存在することを示すために用いられ、相手の押し付けに反抗するanti-face-threatening機能を果している。また、「それで」は後に続く表現を省略するという方法を用いて、FTAを引き出す機能も持っている。二つの機能は、前者が主機能であり後者が付随的な機能である。ここで注目しておきたいことは、これらの機能はそれぞれ対立するものではなく、「それで」が二つの機能を同時に果たすことができることから導かれる結果である。

(12) [上司と部下の会話]

1A: 奥様、とってもいい方ですね。本当に美人だと思われませんが。

2B: それで。

3A: いや、最近とても調子よさそうですから。ところで、お忙しくはないですか。

4B: うん、ないよ。君は最近どうなの?

(13) [友人同士の会話]

1A: あんたもしかして幸子のことが好きなんじゃないの?

2B: それで。

3A: あ、ごめん。ただ聞いてみただけなの。

4B: 二度とそんなこと聞かないで。

(12)の「それで」は、Bがそんな話題のことについては話したくないのに、1Aがそれとは逆に「美人だと思われませんが」と自分の意見を間接的に言うことで、faceが脅かされたと感じ、その発話に対抗するために用いられたのである。話者は「それで」を用いることによって、相手に対する気持ちを詳しく述べなくても、‘話したくない、聞くな’のような気持ち

を相手に伝えることができるのである。なぜなら、「それで」には通常「結果を導く」という機能があるため、相手には話し手が「発話の根拠を反問している」という意識が働くからである。したがって、**anti-face-threatening**機能を持っている「それで」を用いて、相手が押し付けをしたことを知らせることができる。その結果、3Aでは「いや」と謝罪をし、「お忙しくはないですか」のような表現を使って、新たな話題に談話に転換しようとしている。

(13)の場合、1Aが疑問をいうという間接的な表現を用いているが、内面的には幸子のことが好きななんだと相手の考えを感知する意図で、押し付けをしてfaceを脅かしている。それに対抗して2Bでは、‘それがどうしたのか’という自分の気持ちを「それで」一語で表現されているわけである。話し手は「それで」を用いて、faceを脅かされたことに反発しながら、相手の反応を催促している。そして、3Bの聞き手は「それで」という表現を聞くと、FTAしたことを理解し、理由を聞かなくても、自分の気持ちを抑えて「ごめんね。ただ聞いてみただけなの」と謝罪と言いつつ話し手の気持ちを理解し、相手の考えを受け入ることでFTAを中和させようとしている。

このように「それで」には、相手からの何等かの形で行われるface-threateningに反発する**anti-face threatening**機能があることがわかる⁸⁾。

5. 「それで」と談話の連続性

Pre-startsとして用いられる「それで」は、それ自体が相手のFTAに対応するために用いられる**anti-FTA**マーカ―であるが、同時にその機能を補足するように相手のfaceを脅かす表現を引き出す機能がある。その引き出された表現と談話の連続を観察すると、それには大きく分けて**positive**に働く場合と中和する働きを持つ場合の二つの表現があることがわかる。前者が相手のfaceを積極的に脅かす場合であり、後者が相手が脅かしたfaceに反発しながらもを中和しているため、その意見が受け入れられる、あるいは同意される場合である。

ここではface-threateningマーカ―としての「それで」と談話の連続性の保持という点から、談話の中でどのような働きをし、その談話をどのように補足するのかを考察してみる。

8) 「それで」と同類の談話マーカ―である「だから」にもこのような機能を持っている。しかし「それで」のほうが相手に対するFTAの度合いが強いと言える。

5.1 「それで」とpositive factor

Anti-FTAマーカである「それで」を用いて相手のFTAに反発するだけでなく、さらに、理由を加えて相手のfaceを脅かす場合がある。このような「それで」にはpositive factorがあると考えことにする。positive factorが「それで」に含まれる時、相手もFTAを含む発話をすることが多い。したがって、この節では「それで」が相手からのface-threatsに積極的に反発し、さらにface-threatening機能を持つ発話を用いて、その理由を加えることで相手のfaceを脅かしていると考えられる場合について分析し、考察を加える。

(6) [友達のお母さんの話に対して]

1A: オフクロと話してたのか?

2B: お母さんにカンチの好きな食べ物色々聞いたからさ、今度作ったげるね。

3A: それで、おまえ、何を考えてるんだよ。

4B: 何怒ってんの?

5A: もう電話でるなよ。

(東京ラブストーリー)

(14) [裁判に対する話]

1A: あれでは、全く話になりません。あなたは決めたつもりかもしれないが、あれでは裁判官の心証を悪くしただけです。根拠はデータに過ぎないとか、そのデータの裏付けが法廷では全てなんです。

2B: だから犯罪者の抜け道になるんです。精神鑑定は通り抜けられても、鑑定人の心までは抜けさせないわ。

3A: それで専門家のつもりならやめるべきだ。あなたは思い上がってる。

4B: そうかもしれませんが、だけど、もう彼を止められる人間はどこにもいないんです。

(刑法第三十九条)

(6)では、3Aで「何を考えてるんだ」という強い自分の意志を述べているが、これは前にも述べたように、1Aの発話による意図を無視し、2Bの言葉で「お母さんと電話したのが何かわるいのか」という意味が含まれていると考え、「それで」によって反発するだけでは十分でないと感じたため、積極的にfaceを脅かす表現を補足的に用いている。つまり、相手のfaceを脅かしているため、結局、4Bでは相手の意見を受け入れず、さらに反発している。このことから「それで」は、結果を示す表現を加えることで積極的にfaceを脅かす表現を引き出す機能があることがわかる。この例のようにface行為が相互にFTAとなり、中和されずや

り取りされる場合、緊張した談話となる。このような談話の性格もface行為による分析によってのみ明らかにできるのである。

(14)の場合、2Bの言葉に「あなたの考えは甘いのだ」という気持ちが含まれていると考え、自分のfaceが脅かされていると感じ取っている。そのため、3Aでは「それで」を用いるとともに、「あなたは思い上がってる」という積極的な表現を用いてさらに相手をFTAしている。そのために4Bのように一応相手の意見に同意しながらも反発する「だけど〜」のような会話が続くのである

以上のようなタイプの談話は、意見の対立や誤解といった談話における論争的な場面によく見られると考えられる。

5.2 「それで」とface-threateningの中和

「それで」に続く表現が相手のfaceを積極的に脅かさず、むしろ「それで」のFTA機能を中和しているため、faceのやり取りが頻繁にあらわれない場合である。

「それで」には談話を構成するという点からみると、turn-taking、話題の拡張、attention getterなどの働きがあると思われる。これらの機能はそれぞれ独立するものではなく、一つの「それで」が幾つかの機能をもつことが多いということである。この節では、それらの機能が「それで」のfaceを脅かす機能からどのように派生されているのかを考察してみる。

(15) [ゼミでの先生と学生の会話]

1A: そうすると、例えば、どんな関数使うわけ? 例えば、

2B: 例えば、だから、Yの関数を与えておいてこれがYについての

3A: (それで)で、どんな形してるの?

4B: え、非現象関数。例えば、CYの関数、あのCYとかいう関数で与えて、
これにあの構造

5A: Cはコンスタントでしょ。

6B: ええ、そうです。

(科学技術日本語講義)

(16) [友人同士の会話]

1A: 北原にか。

2B: はは。

3A: おまえ、この前の彼女はどうなったんや

4B: あいつか。あれはもうあかん。俺が急ぎすぎたけん、怒らせてしもうだ。

5A: それで、今度は北原か。

6B: ほうじゃ。おまえがつきおうてへんのやったらな

(月光の囁き)

(15)の「それで」は、2Bが「だから」という間接的なFTAマーカ―に対して、反発するため用いている。つまり、相手の発話には自分が意図していることを感じ取っていないと感ぜられるため、「それで」を用いるとともにさらに「どんな形してる」という表現を補足している。そこで4Bは自分が相手の発話意図をキャッチしていないことを保持するため、さらに具体的な説明を加えている。しかし、5Aは相手が自分の意図をまだ十分に感じ取っていないと認識し、「Cはコンスタントでしょ」という表現を用いてさらに押し付けている。そこで、6Bは相手に間接的にFTAを行なったことを感じ、「ええ、そうです」という同意の表現をもちいて、それを中和しようとしている。また、このような「それで」は2Bの話し手が話を終えていないのに相手の話を中断(interrupt)し、turn-takingをもたらすと共に同一の話題の中で情報拡張の機能を持っているといえる。

(16)の場合は、4Bで「俺が急ぎすぎたけん、怒らせてしもうだ」という直接的な表現を用いて、‘どうすればいいのか、どう思うのか’という押し付けをしていると考えられる。これに対して5Aは、「それで」を用いて‘そうなのか、俺は分からない’という気持ちを表すだけでなく、「今度は北原か」という疑問表現を用いることで、FTAを補償しようとしている。それで、6Bでは相手を同情し、新たな話題に転換しようとしているのである。このような「それで」には話者交代と伴って、同じ話題に焦点を合わせ強調する機能(highlighting)を持っているといえる。

このようなタイプの談話は、話し手の意見に対して反発しながらも、それにさらにfaceを脅かす、発話を加えずに、それを受け入れてもらおうと、説得するあるいは言い訳をするような場合に多く見られる。

6. 終りに

本稿では、談話におけるpre-startsとしてあらわれる「それで」を取り上げ、face行為理論から、相手の意見に反発する例を整理し、談話における用法について考察した。その結果をまとめると次のようになる。「それで」は、相手のfaceを脅かす機能を持つ談話マーカ―であるため、公的な場面や社会的関係が上位の場合には用いることができない。そのため、

普段の談話では相手のfaceを脅かす機能がない「それでは」を「それで」の代わりに用いることになる。

「それで」は、話し手の発話に自分をFTAする要素が含まれている場合、それに反発するために用いられ、anti-FTAマーカ―として機能する。特に、「それで」が単独で使われる場合は、anti-FTAマーカ―としての機能と共に、続く表現を用いなくてもFTAを引き出す働きもある。

「それで」に続く発話が、「それで」の持つface-threatening機能を補足するために引き出される場合、positiveな機能を果たす場合とneutralな機能を果たす場合がある。さらに「それで」のfaceを脅かす機能から、highlighting、話題の拡張、attention getterなどの談話上の機能が派生される。

このような結果は、「それで」を談話レベルでとらえ、聞き手と話し手の間に用いられる語用論的な意味関係を把握することで得られるものである。「それで」のような話者自身の内在的意識を主に示す表現は、談話において重要な役割を果たしており、その機能や意味を明らかにするには従来の文法を越えた談話分析の枠組みが必要である。

【例文の出典】

本稿で例文を引用した資料は次の通りである。

柴門ふみ(1991)『東京ラブストーリー』小学館

大森寿美男(2000)『39刑法第三十九条』『99年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編 映人社

塩田明彦、西山洋一(2000)『月光の響き』『99年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編 映人社

井出祥子(1984)『主婦の一週間の談話資料』三勇社

仁科喜久子(1994)『科学技術日本語講義』学術文献普及会

【参考文献】

相原林司(1986)「接続語句と文章の展開」『日本語学』6、9

有賀千佳子(1993)「談話における接続詞の機能について―「それで」の用法を手がかりに―」『日本語教育』79号

池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」国立国語研究所『談話の研究と教育』(日本語教育指導参考書 11)大蔵省印刷局

奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそいあわせ文 - その体系性をめぐって -」『教育国語』87

岩沢治美(1985)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号

沖 裕子(1996)「談話型接続詞における省略の構造と逆接―「だって」と「なぜなら」「でも」―」『論集 言葉と教育』和泉書院

- 国立国語研究所(1989)『談話の研究と教育』日本語教育指導参考書11、大蔵省印刷所
- 蓮沼昭子(1991)「談話における『だから』の機能」姫路独協大学外国語学部記要4
- 曹 永湖(1997)「談話マーカ―『だって』:Face行為理論によるアプローチ」『日文学報』第39号、韓国日本学会
- _____ (1998)『Face行為理論による談話マーカ―の研究』未刊行博士論文、東北大学文学部
- _____ (2000)「日韓両言語の談話におけるface行為の対照分析」『日語日文学』第13号、大韓日語日文学会
- メイナード・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- Blakemore, D. (1987). *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Basil Blackwell
- Blakemore, D. (1992). *Understanding utterance*. Oxford: Blackwell
- Brown, G., & Yule, G. (1983). *Discourse analysis*. Cambridge, England: Cambridge University Press
- Brown, P., & Levinson, S. (1978). *Universals in language usage: Politeness phenomena*. In E. Goody (Ed.), *Questions and politeness* (pp. 56-269). Cambridge: Cambridge University Press
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press
- Buck, R. A. (1997). Toward an extended theory of face action : Analyzing dialogue in E.M. Forster's A Passage to India. *Journal of Pragmatics*, 27, 83-106
- Cook, H. M. (1988). *Sentential particles in Japanese conversation: A study of indexicality*. Unpublished dissertation. University of Southern California.
- Duncan, S. Jr. & Fiske, D. W. (1977). *Face-to-face interaction: Research, methods, and theory*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Fraser, B. (1975). *The concept of politeness*. Paper presented at the 1985 NWAWE Meeting, Georgetown University.
- Fraser, B. (1990). Perspectives on politeness. *Journal of Pragmatics*, 14, 219-236
- Goffman, E. (1971). *Relations in public*. New York: Basic Books.
- Ide, S. (1990). How and why do women speak more politely in Japanese? In S. Ide & N. MaGloin Hanaoka (Eds.), *Aspects of Japanese women's language* (pp. 63-79). Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. London/New York: Longman.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese, *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426
- Matsumoto, Y. (1989). Politeness and conversational universal : Observations from Japanese. *Multilingua*, 8(2/3), 53-80
- Maynard, S. K. (1993). *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese Language*. Amsterdam: John Benjamins
- Meier, A. J. (1995). Passages of politeness, *Journal of Pragmatics*, 24, 381-392
- Tanaka, S., & Kawade, S. (1982). Politeness strategies and second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 5, 18-33
- van Dijk, T. (1979). Pragmatic connectives. *Journal of Pragmatics* 7, .447-456

논문투고일 : 2020년 12월 20일
 심사개시일 : 2021년 01월 17일
 1차 수정일 : 2021년 02월 09일
 2차 수정일 : 2021년 02월 15일
 게재확정일 : 2021년 02월 17일

＜要旨＞

談話マーカ-の新たなアプローチ
 - Face行為から見た「それで」しロ -

曹永湖

本研究では語用論において用いられたfaceの概念を談話に適用させ、談話構造におけるfaceの役割を把握するために、face行為理論を提示し日本語における談話マーカ-「それで」を分析対象とし、その特徴や機能を明らかにした。「それで」は、①相手のfaceを脅かす機能を持つ談話マーカ-であるので、公的な場面や社会的関係が上位の場合には用いることができない。②話し手の発話に自分をFTAする要素が含まれている場合、それに反発するために用いられ、anti-FTAマーカ-として機能する。特に、「それで」が単独で使われる場合は、anti-FTAマーカ-としての機能と共に、続く表現を用いなくてもFTAを引き出す働きもある。③「それで」に続く発話が、「それで」の持つface-threatening機能を補足するために引き出される場合、positiveな機能を果たす場合とneutralな機能を果たす場合がある。

A Function of Discourse Marker *sorede*
 - Approched by the Face Act Theory -

Cho, Young-Ho

In this study, the concept of face used in pragmatics is applied to discourse, and in order to understand the role of face in discourse structure, face action theory is presented and the discourse marker “sorede” in Japanese is analyzed. The features and functions were clarified.

“sorede” is (1) a discourse marker that has the function of threatening the other party’s face, so it cannot be used in public situations or when social relationships are high. (2) If the speakers utterance contains an element that FTAs himself / herself, it is used to repel it and functions as an anti-FTA marker. In particular, when “sorede” is used alone, it not only functions as an anti-FTA marker, but also has the function of eliciting an FTA without using the following expressions. (3) When the utterance following “sorede” is drawn to supplement the face-threatening function of “sorede”, it may perform a positive function or a neutral function.